124 腎障害を伴ったカドミウム汚染地住民の全身骨塩量と血中ビタミンD3濃度（第1報）

瀬戸 光，清水正司，蔭山昌成，野村邦紀，渡辺直人，亀井哲也，二谷立介，柿下正雄(富山医薬大 放射線科)

カドミウムは種々の臓器ばかりでなく、骨にも障害をひき起こす事が報告されている。カドミウム汚染地域住民で尿細管障害を認めた男性16名(62～74歳)，女性10名(62～76歳)に全身骨塩量(BMC)，腰椎骨密度(BMD)および三種類の血中ビタミンD3濃度を測定し、これらの相関を検討した。男性ではBMD: 0.827±0.105 g/cm^2, BMC/H:12.9±1.9 g/m, 女性ではBMD:0.578±0.145 g/cm^2, BMC/H: 9.1±2.2 g/m と健常者に比べて減少を認めた。BMC/HとBMDは非常に良い相関 (r=0.89, p<0.01)を認めた。BMC/Hと各種ビタミンD3濃度の関係では，25(OH)D3および1α, 25(OH)2D3とは有意な相関は認めなかったが、24, 25(OH)2D3とは相関が認められた (r=0.41, p<0.05)。

125 Evaluation of Bone Metastasis by Tc-99m MDP Scan in Korean Stomach Cancer Patients

CW Choi, JS Ryo, SE Kim, J-K Chung, MC Lee, NK Kim, C-S Koh, College of Medicine, Seoul National University, Seoul, Korea

We reviewed 359 cases of bone scans and 242 cases of medical records, which were performed in SNUH since 1983. Patient's mean age was 53.5 years and male patients were 227 cases(63%) and female, 132 cases(37%). 167 cases(46.5%) of 359 bone scans had abnormal findings suggesting bone metastasis. Most common site was in spine (110 cases, 30.6%) and followed by in rib (97 cases, 27.0%), pelvis (71 cases, 19.8%), femur (57 cases, 14.2%) and skull (36 cases, 10.0%). Bone metastasis was increased by the degree of initial clinical stage (stage II 28.6%, stage III 42.5%, stage IV 56.5%, mean follow up duration was 14.8 months, 10.9 months, 5.4 months at each stage) but there was no corelation between bone metastasis and phathological cell type. Serum alkaline phosphatase was significantly correlated with boen scan findings(p<0.001).

126 び慢性集積増加型骨転移所見の経時変化

小野 慈，奥村 貴聰，伊勢 俊秀（神奈川県がんセ・核）猪狩 秀則（横浜市大・放）

Super Bone Scan, Beautiful Bone Scanと言われる骨シンチのび慢性集積増加像を呈した症例の予後と同所見の経時的変化を調査したので報告する。1981年1月から1990年12月までの10年間に検査した骨シンチ 11662件のうち同所見を呈した症例は34例であった。原発部位は前立腺12，乳腺12が多く肺，胃などがこれに次いだ。診断確定時に同所見を示したのは10例，経過を追うに従って出現して来たもの24例であった。出現時期は5ヶ月から15年分布し平均2.7年であった。同所見を呈した前回の骨シンチは正常，散発，多発転移と様々であった。同所見出現以後1回以上の骨シンチがあるものは14例あり，改善5例，不変8例，悪化1例であった。同所見発現からの死亡までの期間は平均11ヶ月中央値6ヶ月であった。

127 乳癌の骨シンチグラフィ － 骨転移検出時期の検討 －

大竹英二，村田 啓，高尾祐治，丸野広大（虎の門 放）

乳癌術後に骨転移が生じる時期を骨シンチグラフィを行った症例で検討した。1988年1月から1990年4月までに骨シンチグラフィを行った乳癌症例は279例であり，そのうち47例（17%)に骨転移を認めた。47例中，StageⅣおよび病期不明例を除く34症例を今回の検討対象とした。手術時年令は28～80歳（平均48歳）であり，StageⅠが4例，StageⅡが21例，StageⅢが9例であった。骨転移の検出時期は術後2年以内が6例（18%），5年以内が19例（56%），5年以上が15例（44%)であった。今回の検討では術後5年以上経過してから骨転移が検出された症例が比較的多くみられたが，これらの症例に病期との関係は認められなかった。また，術後の治療法との関係についても検討を加える。

128 転移性椎体腫瘍治療効果判定における骨シンチグラフィの有用性 －ＭＲＩとの対比－

梶谷明子、杉村和朗、内田伸恵、古川珠見、藤田安彦、石田哲哉（島根医大放射線科）

放射線ないし化学治療前後に骨シンチグラフィ（骨シンチ）とGd-DTPA 造影MRI を施行した転移性椎体腫瘍16例42椎体を対象とした。臨床症状の変化により治療有効群(n=23)と無効群(n=19)に分類した。骨シンチでは異常集積の消失を、MRI では造影効果の消失を有効とした。治療有効群は骨シンチで20椎体(87%) が、MRI では21椎体(91%) が有効と判定され両検査法の間に差は無かった。治療無効群のうちMRI では17椎体(89%) が正確に無効と判定されたが、骨シンチでは無効と判定されたのは6椎体(32%) にすぎなかった。骨シンチで集積が消失しても治療効果が無いことが多く、転移性椎体腫瘍の治療効果判定には造影MRI とあわせて評価する必要がある。

129 肺癌骨転移のシンチグラムによる経過観察

吉岡清郎、福田 寛（東北大抗研放射線） 尾形優子（仙台厚生病院放射線）

1985年 3月よりこの6年間で、約1500例の確定診断のついた肺癌症例の骨シンチグラフィを行ってきた。この内約 350例では2回以上の検査を行うことができ、最長5年余の肺癌症例の骨シンチグラムによる経過観察が行われた。これらの集計で、初回検査では転移病巣が確認されず2回目以降で転移出現症例の頻度は、既に報告をした肺癌組織型における転移出現頻度と極めて類似した値を示し、腺癌で最多、扁平上皮癌で最少であった。一度転移が認められた症例では、経過中にシンチグラム上の所見が消失することは小細胞癌を除きほとんどなく、所見は増悪するのが一般的であった。このようなデータにさらなる解析を加え、特に組織型の特徴を踏まえた肺癌骨転移経過観察の至適な検査間隔等を考察したい。

Presented by Medical*Online